

政局を結ぶ人々

山瀬 四頁一、四海書局 大正 15

176

西から上京中の水平社代表を皮肉にも華族會館に招待した。陪賓には兩院の新人諸君——筆者もまねかれて同席したが、南鼎三が、田淵豊吉を殴るといふ一大活劇まで演じて大分同族間の問題となつたらしい、それも、これで見ると見るより眞剣だからいふ。北白川官家から貞子の方を迎へてその室とする彼ではあるが、殿様だの御前様だのと呼ばれる事をきらひ「有馬君」と平民的に呼ばれたいなど告白する面白味は、いまの日本の華族共の間では特筆してよからう。

農學士で、立候補前まで帝大の助教で、デモクラシーのよくわかつた温厚の君子人だ。平民どものお集まりである衆議院では最初の華族議員である。農村問題と階級差別撤廢問題には是非とも彼の一論なかるべからざる所、期待は充分にかゝつてゐる。

ところで、平民の餘計な心配だが頼萬伯も高齢であつて見れば頼寧君より一足先にこの世を失敬する。すると頼寧君は襲爵せねばならん。とすれば代議士になる有難くも苦痛なる資格は取り去られる。彼れは襲爵しないか？ 然るに、皇族は平民に嫁す事が出来ぬといふ規程がある。

「既にもらつてしまつたから——」といふ譯には行くまい。ゆゑにやむを得ず伯爵になるか？ 餘計な心配で、また、家來どもが「平民はまことに失禮なことを」など青筋立てるかも知らねど、頼萬伯に長生きさせて、頼寧君を永く衆議院に置いて見たい。

若尾幾太郎

人事興信録に、若尾幾太郎の項なく親父幾造の一行に加へられてゐる事、頼寧君の頼萬伯におけると同地位である。有馬君が若殿様なら彼れは若旦那である。さて、この若旦那について一層申し上げるに——まづ若旦那の學歴は、横濱商業學校をピリから一番で卒業しただけ。ところが大學を頭の中から一番で卒業して來た様な連中をつかひこなして生糸商若尾商店を一人で切りまはしてゐる程の才物である。幾造翁は、糸よりも株の方で糸の商機は一切俾……いや若旦那に委せて、あの七文半位の小さい靴に長い髻をしいては立つたりすわつたりの一票に通つたものだが若旦那早く野心あり、今日は、親子としてまづ豫選の結果まんまと親父を隠居させ「今度は俺の番だ、俺は親父の様な陣笠ぢや承知せん」とのり出して來た。

何しろ、前回は親父が打つて出たホヤ／＼の四年前から親父も出せば俺も出す、といふので暑中見舞や年賀状を有権者に配つて「幾太郎と幾造をお間違へのない様に」自己宣傳をしてゐた位、満々たる野心を藏してゐたものだ。で彼れの參謀がいふ所によると、選挙費は廿五萬圓使つた。十萬圓は政友會支部へ寄付し、十五萬圓が選挙費と號する。自分から吹聴するのにホンマものは餘りないから半分はホラと見ても七萬五千圓は使つてゐやう。(この不景氣に。)

177

体が水

若旦那、別に酒や女に大した道楽をする譯でもない。普選論や憲政擁護の大義を説く方が道楽で（新聞の受け賣りとあへて申さぬ）道楽の法悦にひたるために「衆議院議員若尾巖太郎」の名刺を作る事としたのである——か、否かはしらないが、まあ／＼生糸業者のために一議席を得ておく方が便利であらう。若旦那どうか糸の値を高くする事を政策としてもらひたい。

178

陸軍中將 長岡外史 内野辰次郎

長岡外史

時代錯誤のヒゲをはやして、時代錯誤の馬車に打ち乗つて、一意専心飛行機の宣傳をするのが陸軍中將飛行協會副會長長岡外史閣下である。閣下はその出身地たる長州から、飛行機にも乗らず、日比谷座へ着陸した。まづ、着陸第一の彼れの仕事は、航空省設置に關する建議案、乃至飛行隊優遇法案、等々、いろいろあつたこと勿論。ハイカラなモーニングにつゝんだ鶴の様な容姿を、壇上に運んで、まづおもむろにあのカイゼル髯をひねつてからに「諸君、そも／＼飛行機の發達たるや……」と講義をはじめ光景は、實に愉快である。

外史君はサーベルの本場長州出身であるにかゝはらず、軍縮風も吹かぬ大正五年に豫備に編入された。筆者がかつて、君から「内證だがね」の前提つきで、陸軍に對する激論を拜聴したことがあるが、もし彼れにして陸軍大將となつて中心勢力内にゐたなら、恐らく筆者は「内證」の陸軍部内のアラを知らずに過ごしたことであらう。夫人芳子の實家が金持ちであること、サーベル流を超越した新人であること、その辯論の雄たること等々、いろいろがわざはひして上からにらまれて現役を去つた彼れ、今度は、感ずる所あり、政界に乗り出して來た、彼れの才氣を以てすれば飛行機の宣傳位に満足してはゐられない筈だ、仙波將軍における恩給法案、彼れにおける飛行機、それ以外用のないといふ種類の人物ではあるまいと思ふが、さてあの常識で判斷できぬ荒い波風の衆議院に入れて煮て見た上でない味の保證はつきかねる。幸ひにして「矢張りサーベルの古手」たるなかれ。

内野辰次郎

内野君も陸軍豫備中將だ。仙波將軍去り、三浦得一郎君去つて、サーベル議員減少の徴ありと思つたは早計、上は中將より下は一等卒にいたるまで、兵隊さんが續々と出てくる、福岡閣で、天寶錢で、宇垣陸相と同窓で、未だ未來のある内野君、つれない軍縮風に吹き倒されて、浮世をか

179